

若者に託す思い

長野の人に知ってほしい

故郷沖縄を伝える

2002年5月、長野市で開かれた全国高校生平和集会に参加した沖縄の与勝高校の生徒が3人、上田市にある伊波さんの自宅に泊まりにきました。

帰る日の朝、みんなで朝食をとっていると、1人の生徒が「伊波先生、長野の風には音がある。私たちは朝目が覚めるとジェット機の金属音がするの、長野は葉ずれの音が聞こえる」と言いました。

伊波さんはその言葉を聞いてショックを受けました。沖縄出身の伊波さん、故郷を離れて40年以上経ちますが、「原点」

として沖縄について考えてきたつもりでした。

「沖縄から遠い信州では、基地問題についても戦争の足音も、よほど頑張らないと感じることはいけません。信州から今の沖縄に対して何かできないか」。もっと沖縄について考え、もっと勉強し、沖縄から遠い長野の人たちの意見を聞くために、2004年8月4日に、信州沖縄塾を設立しました。

沖縄の現状と歴史、文化について学び、学んだことを糧にして信州とこの国を検証し、それぞれの立場で行動することが目標です。

沖縄と信州の文化交流が実現し、2009年10月31日に信州沖縄塾の開塾5周年記念公演「琉球の芸能・伝え継ぐ力」が、長野市の勤労者女性会館「しなのき」で開か

信州沖縄塾では毎年塾生総会を開いて、活動報告、決算報告、企画提案を行っています。

沖縄塾が主催する講演会、講座、交流会、沖縄ツアー等の企画案については、塾生の自主的参加に基いて、運営会議で検討します。

沖縄についての「勉強」だけでなく、沖縄の文化の紹介や体験にも力をいれています。

このように、沖縄から講師を招くことを中心に、沖縄の問題に直接参加する場を提供しています。今年9月「沖縄に新基地を作らせない県民の

長野県の中学生諸君へ！

君たちは、沖縄という地名を耳にすると、どのようなことを思い浮かべるのだろうか？ 青い海、青い空、温暖な島……。ところが、それだけではない沖縄があることも、ぜひ、知って欲しい。沖縄の中学生たちは、アフガニスタンやイラクで戦争をしているアメリカ兵や戦闘機が、自分たちが暮らしている沖縄から飛び立っていることを知っている。そして、65年前の沖縄で、4人に1人が戦争で命を奪われた戦争の悲劇を、自分の祖父母たちから聞いている。長野県にはアメリカ軍基地がない。沖縄は長野県からは、はるか離れた地にある。だからといって、あなたたちと同じ中学生たちが毎日苦しめられている沖縄問題に、無関心でいて欲しくないのだ。少しでも目を見開き、心を寄せて考えてみよう！

信州沖縄塾塾長 伊波敏男

作家・
信州沖縄塾塾長
伊波 敏男さん



【いは・としお】

- 1943年 沖縄県南大東島で生まれる。
- 57年 ハンセン病発病 沖縄愛楽園に隔離収容される。
- 60年 進学のため広島へ逃亡。
- 66年 岡山県立邑久高等学校新良田教室を卒業。
- 69年 中央労働学院卒業 社会福祉法人東京コロニーに就職。
- 93年 東京コロニー・ゼンコロ常務理事就任
- 95年 退職後、執筆活動に専念。
- 97年 自らの半生を描いた、「花に逢はん」が沖縄タイムス出版文化賞受賞。
- 2004年8月 長野県で信州沖縄塾を主宰し、塾長となる。

現在、県内の小中学校をはじめ、各地で講演会を行っている。



『戦火のなかの子どもたち』の絵には、戦争の生んだ悲劇がリアルに描かれている。当時、ちひろはラジオから流れてきた「さとうきび畑」を口ずさみながら絵を描いていた。沖縄戦をテーマにしたこの曲と



「戦火のなかの子どもたち」より
1973年

ちひろの想い 地上戦の地へ

ベトナム戦争を重ねて描いたのだろう。これらの絵には、「戦争」とは何なのかを深く考えさせられる。今回の展示にはかなりの準備が必要だったと安曇野ちひろ美術館職員の高方路子さんは話す。通常、絵は美術品専用トラックで現地へ運ぶが、今回の展示会場である、那覇市の沖縄県立美術館まではかなりの距離があるため、飛行機で運んだ。飛行機で運ぶと、温度や湿度が急激に変化し、作品が傷む恐れがあるため、作品は厳重に梱包された。このようにして運ばれた絵には、「いつまでも平和な世の中であってほしい」「平和ってなんだろう、と考えさせられた」などの、若い人から多くの感想が寄せられた。

現在、沖縄戦を知らない人が多くなっている中で、来場者にとって、今回の展示は平和について改めて考える場ともなったのでは、と高方さんは語っている。スタッフも考えさせられたちひろ展。しかし、反省点も多かったという。

今回の来場者数は約1万8000人。これはこの美術館で行われた美術展では最高人数だが、高方さんは「準備がギリギリになっただけで、ポスターなどでの事前の宣伝が不足した結果、来場者数が思ったよりも伸びなかった。もっとはやくから広報にとりかかれればよかったと思う」と語る。館外におけるこの企画は、開いたことがない所、しばらく開いていない所を選んで計画されている。次に沖縄で開かれるのは未定だ。しかし、今回の来場者には平和を訴える気持ちが伝わったのではないだろうか。

「世界中の子どもみんなに平和と
しあわせを」1970年